第３部　「子どもたちの生活や行動に及ぼす価値観について」

子どもたちの生活や行動に影響していると思われる価値観について分析した。

１．睡眠と家族関係

（１）第２部における結果の概要

第２部では、小学生の４割弱、中学生の５割以上が、必要だと思っている時間ほどは睡眠がとれておらず、学年が進むにつれて睡眠時間が足らなくなることが示された。

中学生になると、部活動や受験勉強、塾通い、趣味、電話やメール、ゲームなど「やるべきこと」や「やりたいこと」が増えるにつれ、寝る時間が遅くなり、自分が必要と思っている睡眠時間が取れない状態、いわゆる“睡眠不足”になってしまうと考えられる。また、親子間の関係にも変化が見られる時期でもあり、家族とのふれ合いで気持ちが満たされていると感じること、“満たされ具合”が子どもたちの生活に影響を及ぼすことも考えられる。

そこで、ここでは睡眠時間と家族関係に焦点を当てて、その関連を検討することとした。

この両者の関係の検討は、第２部で構成した３つの群、「必要だと思っているよりも睡眠時間が多い群＝過剰睡眠群」、「必要だと思っている程度の睡眠時間がとれている群＝睡眠一致群」及び「必要だと思うよりも睡眠時間が少ない群＝睡眠不足群」の中の「睡眠不足群」に着目して分析した。

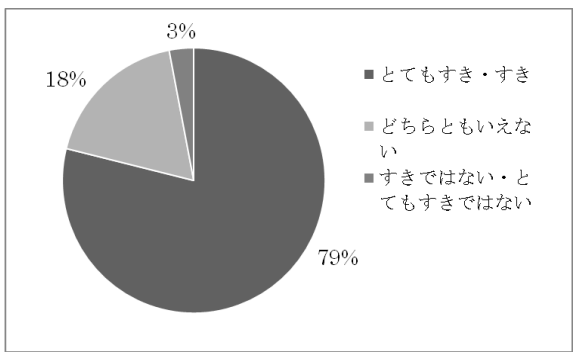
（２）「睡眠不足群」における「家族への好悪感情」

小学生から中学生にかけて変化するものの一つに、親子間の関係が挙げられる。小学校低学年から中学年にかけては親の影響力が強く、家族と行動したり過ごしたりすることが多い。しかし、小学生高学年から中学生にかけては、家族よりも友だちの影響を受け、親離れをしていく傾向にある。

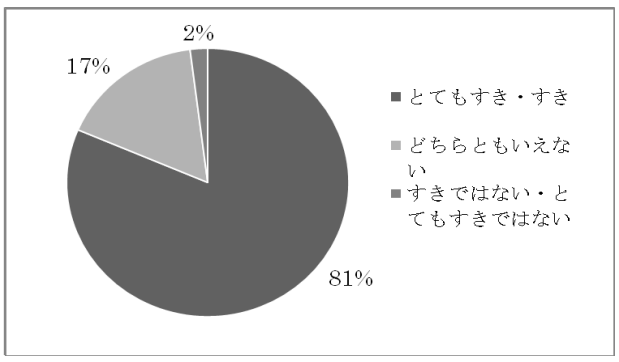
そこで、それぞれの年代の「家族への好悪感情」による子どもたちの満たされ具合と、「睡眠不足群」との関係を調べることにした。

小学生の「睡眠不足群」における「家族への好悪感情」

図①　小学生男子



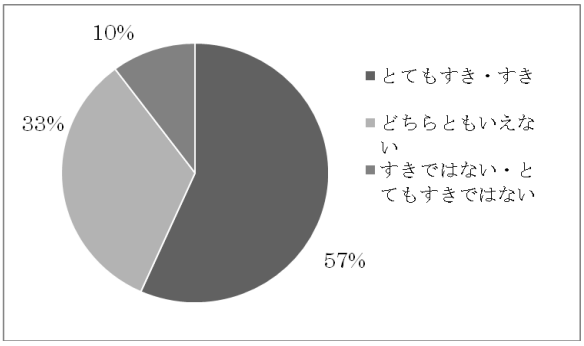
図②　小学生女子



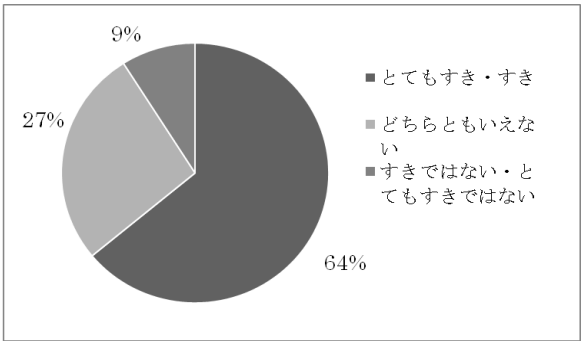
小学生の「睡眠不足」群では男女ともに、「とてもすき・すき」と回答しているのが約８割、「どちらともいえない」との回答が約２割、「すきではない・とてもすきではない」との回答はほぼない。

中学生の「睡眠不足群」における「家族への好悪感情」

図③　中学生男子



図④　中学生女子



中学生の「睡眠不足」群では男女ともに、「とてもすき・すき」と回答しているのが約６割、「どちらともいえない」との回答が約３割、「すきではない・とてもすきではない」との回答が約１割である。小学生と比べると、「どちらともいえない」「すきではない・とてもすきではない」と回答している割合は多い。

小学生から中学生へと学年が上がるにつれ、家族のことを「とてもすき・すき」から、「どちらともいえない」、「すきではない・とてもすきではない」と回答する割合が増える。一緒にテレビを見たり外に出かけたりと、家族とともに過ごす時間の多い小学生では、家族の生活スタイルの影響を受けやすく、睡眠不足につながるのではないかと考えられる。

中学生では、成長していく中で、生活スタイルが生徒自身や友だちとの時間が中心となるが、家族に対して“満たされない感覚”が生じることも、睡眠不足と関連していることが考えられる。

（３）「睡眠不足群」の求める家族の姿

（２）では、小学生に見られるように、家族が好きでも、家族の生活スタイルに合わせ、家族とともに過ごす時間が多いと睡眠時間が満たされないことがあること、中学生に見られるように、家族から離れる年代になり家族とではなく自分自身や友だちとの時間が増え、睡眠時間が満たされなくなることがあることを述べた。では、このような子どもたちは、家族に何を求めているのだろうか。何によって、家族に“満たされている感覚”を感じるのだろうか。それを検討するために、「睡眠不足」群が、どのような形態の家族を求めているのか調べてみることにした。

問２０　あなたは、どのような家族がよいと思いますか。

1.　仲のよい家族	2.　休みにはみんなで出かける家族
3.　何でも話し合える家族	4.　いっしょに食事ができる家族
5.　困った時、助け合える家族	6.　悪いことをした時、注意してくれる家族
7.　その他	

①　小学生男子の「睡眠不足群」が求める家族の姿

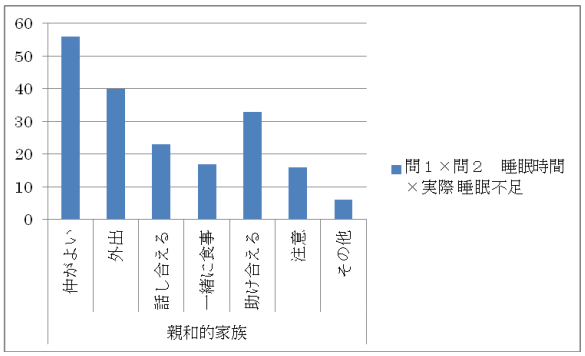
小学生男子の「睡眠不足」群では、「仲がよい家族」の回答が最も多く、続いて「休み

にはみんなで出かける家族」「困った時、助け合える家族」が多い。

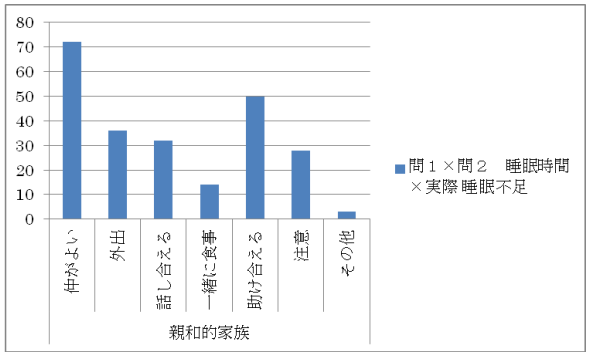
② 小学生女子の「睡眠不足群」が求める家族の姿

小学生女子の「睡眠不足」群では、「仲がよい家族」の回答が最も多く、続いて「困った時、助け合える家族」が多い。小学生男子で多かった「休みにはみんなで出かける家族」の回答は、男子ほど多くない。

図① 小学生男子



図② 小学生女子



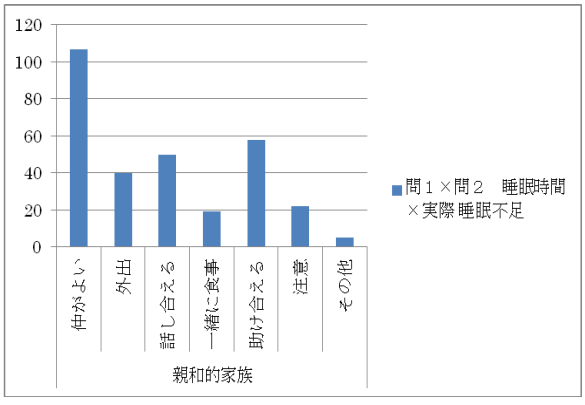
③ 中学生男子の「睡眠不足群」が求める家族の姿

中学生男子の「睡眠不足」群では、「仲がよい家族」の回答が最も多く、続いて「困った時、助け合える家族」「何でも話し合える家族」が多いが、「仲がよい家族」の半分程度の回答である。

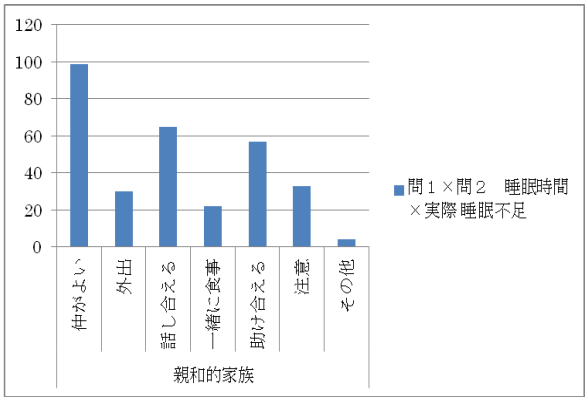
④ 中学生女子の「睡眠不足群」が求める家族の姿

中学生女子の「睡眠不足」群では、「仲がよい家族」の回答が最も多く、続いて「何でも話し合える家族」「困った時、助け合える家族」が多い。

図③ 中学生男子



図④ 中学生女子



小学生から中学生へと学年が上がっていく中であっても、「仲がよい家族」「困った時、助け合える家族」を求めており、それが実際の生活の中でも実感できる環境であるならば、子どもたち自身“満たされている”感覚が得られていると考えられる。

また、小学生から中学生へと学年が上がると、「何でも話し合える家族」ということを求めるようになっていく。

（４）まとめ

必要だと思っている睡眠時間がとれていない子どもは、小学生から中学生に学年が上がるにつれ、家族のことを「どちらともいえない」、「すきではない・とてもすきではない」と回答することが多いという結果であった。中学生になると小学生の時と比べ、家族との関係が希薄化し、家族よりも子どもたち自身や友だちとの時間が多くなることで、必要だと思っている睡眠時間がとれない状況になっていると考えられる。

子どもたちは「仲がよい家族」「困った時、助け合える家族」を求め、学年が上がるにつれ、何でも話し合えることも求めるようになる。

今回、小学４年生から中学３年生までの段階で調査をしたが、それぞれの年代で必要だと思っている睡眠時間がとれていない、いわゆる「睡眠不足」群が家族についてどう思い、どんな家族を求めているかの一面がわかった。「家族との関係がよければ、必要だと思っている睡眠時間をとるようになる」とまでは言い切れないが、子どもたちの気持ちや思いを満たすことで、安定した生活が送れるようになるのではないかと考えられる。子どもたちの“満たされ具合”を様々な方向から把握し、その場その場でできるサポートを行っていく必要がある年代であろう。

２．社会的なマナーと体験

（１）第２部における結果の概要

第２部では、「私物の持ち込み」や「授業中の行動」については、守らなくてもよいと考えるにも関わらず行動面では守っていると回答する子どもたちが少なからずいること、「あいさつ・返事・謝罪・お礼」などの社会的マナーについては、そうすべきだという意識は高いものの、その通りにはしていないと回答している割合が、小・中学生男女ともに３～４割いるという結果が示された。社会的マナーの方がルール（規範）よりも、考えているとおりには実践していないということである。ここでは、社会的マナーについて考察を深めてみたい。

（２）「社会的マナー」と体験

子どもたちは、社会的マナーを家庭・学校・地域という集団の中で学ぶことが多いと思われる。それぞれの集団生活の中で、いろいろなことを経験し、それに、あいさつ、返事、謝罪、お礼などの「社会的マナー」がともなうことが大きいと考えられるからである。そこで、「社会的マナー」の実践力と今までの体験との関連をクロス集計して分析することにした。

問３　あなたは、生まれてから今までに次のような体験をしたことがどれくらいありますか。

A　赤ちゃんにふれたり、抱っこしたりする	B　果物や野菜の皮を包丁でむく
C　のこぎりを使ってものを作る	D　本やテレビで感動して泣く
E　友だちと本気でけんかをする	F　親が働いている姿を見る
G　地域のお祭りやイベントに参加する	H　海や山で遊ぶ
I　かくれんぼやおにごっこをして遊ぶ	J　虫を捕まえる
K　親に絵本や本を読んでもらう	
L　親に美術館や博物館に連れて行ってもらう	

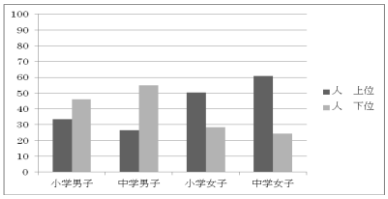
問３の A～L の体験を、①人とのふれ合い、②自然とのふれ合い、③道具を使った体験に分類した。分類方法は以下の通りである。

①『人とのふれ合い』・・・A、D、E、G
②『自然とのふれ合い』・・・H、I、J
③『道具を使った体験』・・・B、C
（F、K、L については、親の働きかけがあって実現可能な体験が多いため省いた。）

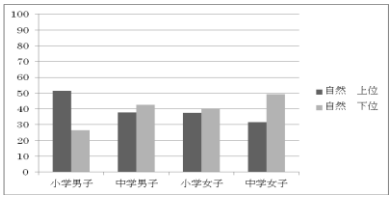
次に①～③それぞれの項目についての体験の程度を加算して点数化して平均し（3～5点)、体験が多く得点が高い上位群と、体験が少なく得点が低い下位群に分けた。小中・男女別に見た各体験群の２群（上位群・下位群）の割合は次のとおりである。

【小中・男女別】

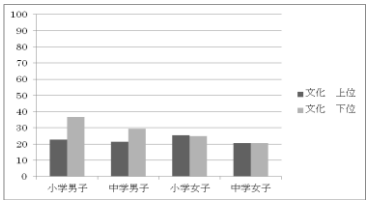
①人とのふれ合い体験群



②自然とのふれ合い体験群



③道具を使った体験群



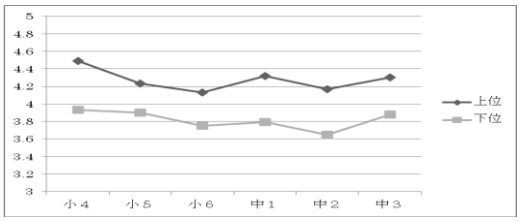
①の人とのふれ合い体験群では、女子の方が体験が多く、②の自然とのふれ合い体験群では、小学生男子で体験が多い。③の道具を使った体験群では、男子に体験が少ない。次に、各体験群の２群と問１３の社会的マナーとの関連を学年別に見た。

問１３　あなたは次のことをしますか。

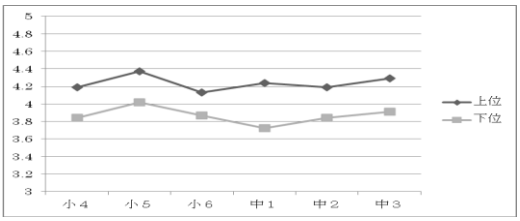
A　自分からあいさつをする	B　呼ばれたら「はい」と返事をする
C　知らない人とぶつかったときに謝る	D　親切にされたとき、お礼を言う

①人とのふれ合い体験群×社会的マナー

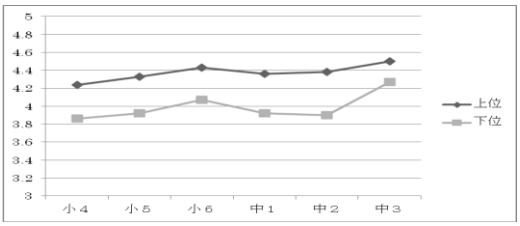
ｱ、あいさつ



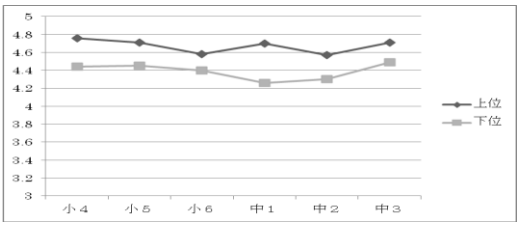
ｲ、返事



ｳ、謝罪

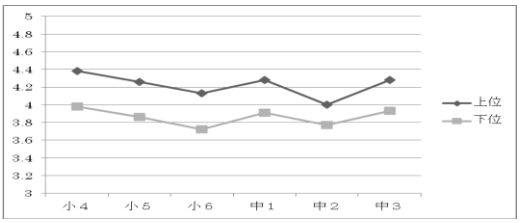


ｴ、お礼

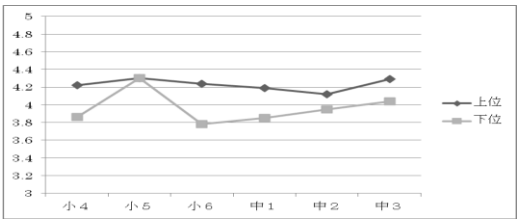


②自然とのふれ合い体験群×社会的マナー

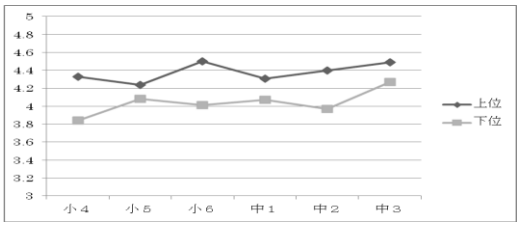
ｱ、あいさつ



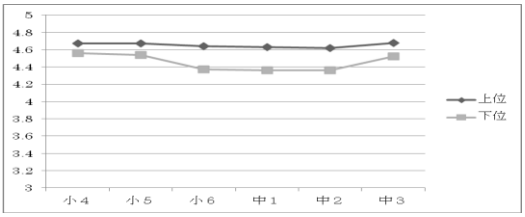
ｲ、返事



ｳ、謝罪

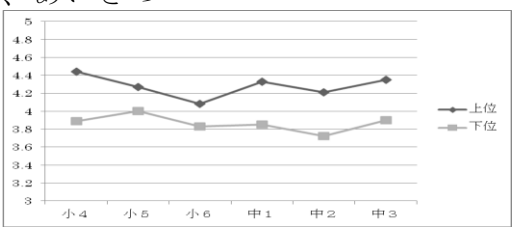


ｴ、お礼

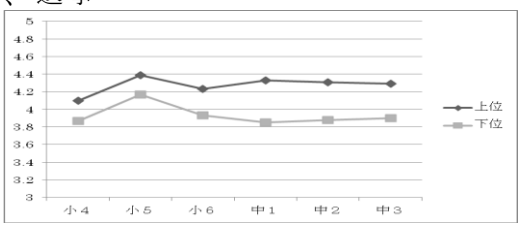


③道具を使った体験群×社会的マナー

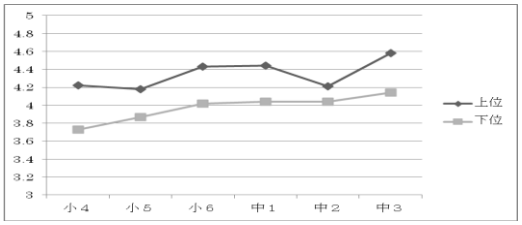
ｱ、あいさつ



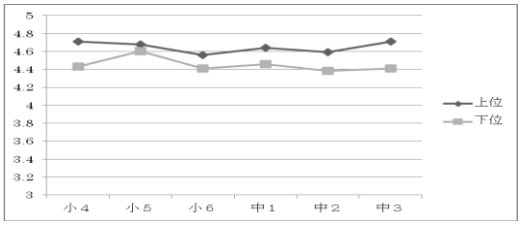
ｲ、返事



ｳ、謝罪



ｴ、お礼



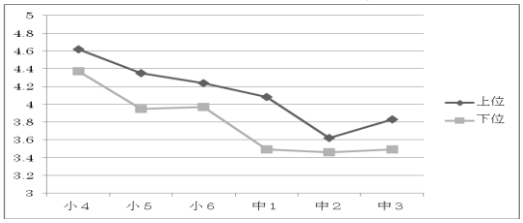
どの体験群においても、体験が多いほど社会的マナーが身についていることが読み取れる。

（３）体験と家族

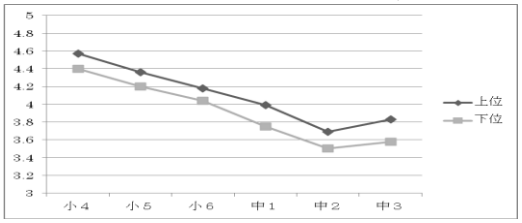
次に、「社会的マナー」の定着と関連が深い様々な「体験」と最も基本的な生活集団である「家族」とも関連があるのではないかと考え、「体験」と「家族についての意識（好悪感情)」とをクロスさせて分析を行った。

問 20　あなたは、自分の家族についてどう思いますか。
１．とてもすき　　２．すき　　３．どちらともいえない
４．すきではない　　５．とてもすきではない

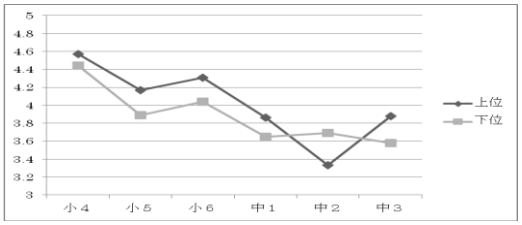
①人とのふれ合い体験群×家族



②自然とのふれ合い体験群×家族



③道具を使った体験群×家族



学年別の家族への好感度は、学年が進むに連れて下がり、中学２年生で最も低くなる傾向があるものの、どの体験群でも上位群が下位群を上回り、家族を好きと感じていることが読み取れる。

なお、家族への好悪感情について、中学２年生で最も低くなったり、ある体験群で上位群と下位群が逆転したりすることについては、思春期特有の現象とも考えられ、次の資料A,Bを参考にしていただきたい。

（４）まとめ

子どもたちが社会で自立して生活するうえで、社会的なマナーを身に付けることの重要性は誰しもが認めることであろう。その社会的なマナーと人やもの、生き物、自然、伝統や文化など様々な物事にふれ､体験することが深く関連していることが伺える結果がでた。

家庭や学校、地域社会が一体となって子どもたちの体験の機会を増やすことが大切であろう。

資料A

小６から中２の時期は思春期と呼ばれ、親に秘密を持ち始める時期である。親に何でも言わないことが、思春期の証であった。第２次性徴という身体の変化と向き合い、自分らしさ、自分とは何かを模索し、自我の形成と自立に向けて、親からの心理的な離乳を達成するために、親に無理にでも背を向ける、親たちの示す既成価値に違和感、嫌悪感を表す。そんなメカニズムが発動する時期であったはずである。今の子どもたちは、親に何でも話し、秘密をもたないのであろうか。それとも、もっと巧妙に自分ちは、親に何でも話し、秘密をもたないのであろうか。それとも、もっと巧妙に自分の本音、心の奥底を隠して親に合わせ、熱心で「やさしい」親を安心させているのであろうか。否、隠していることも意識しないで、親の暗黙の期待に応え、子どもも親に「やさしい関係」を結んでいるのだろうか。このどれもがあてはまる可能性があろう。一見、良好にみえる親子関係のなかで、子どもたちは自分自身の心の発達過程を遅延させているかもしれない。あるいは、子どもが親を心配させない「よい子」として生きる、つまり早期に大人の役割をとることで、本音が言えない、自分の本音が何であるかがわからないといった不自由さや不全感をどこかで抱えるかもしれない。昨今の若者が、外見に比して心が幼いといわれたり、やさしくソツがないけれども、覇気がないといわれたりすることの背景と関連していそうである。略

（2010・3　第２回子ども生活実態基本調査報告書　ベネッセ教育研究開発センター）

資料B

2004 年調査の際には、小さいころの体験が豊かであるほど、現在の親との関係や自己評価などが良好であるとの分析結果が得られた。これらの小さいころの体験は、現在の評価だけではなく、将来展望の基盤となりうると考えられる。（略）

すなわち、文化体験については子どもの知的な関心の成長につながり、かくあるべきといった理想論的未来展望の獲得へつながると考えられる。そのため、「幸せになりたい」「家族を持ちたい」「活躍したい」といった目標志向性の高い未来のイメージを想像しやすくなる半面、やや自由にのんびり、といったイメージは描きにくくなる子もいるのだろう。一方、情緒体験や自然体験については、子どもの生活感覚や他者との関係性における成長につながり、人とのかかわりの中で自分がどうありたいか、といった将来展望につながるのではないだろうか。（略）

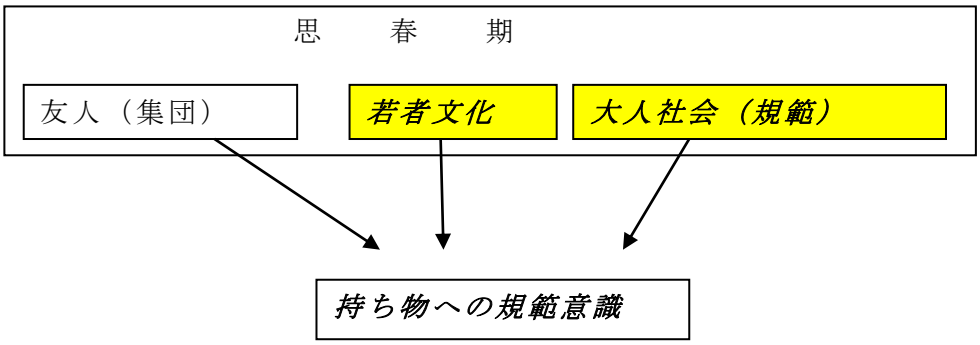
（2010・3　第２回子ども生活実態基本調査報告書　ベネッセ教育研究開発センター）

３．私物の持ち込みと若者文化

（１）第２部における結果の概要

第２部では、中学生に行動と意識のずれが大きかったのは、私物の持ち込みであった。学校で持ち込まないよう指導されている物を実際は持ってきてはいないが、持ってきてもよいという回答が多かったからである。

思春期における特徴としては、友人との強い結びつき、若者文化に対する憧れ、大人社会への疑問などが考えられるが、これらの事が「私物の持ち込み」への規範意識に影響を与えていると考えられる。



そこで、ここでは若者文化の憧れとして、問６染髪についてと、問８ピアスについての意識を取り上げてクロスし、若者文化への憧れの強い中学生女子に焦点をあてることにした。また、「私物の持ち込み」については、お菓子及び携帯電話にしぼって分析することとした。

（２）「私物の持ち込み」への規範意識と染髪・ピアス（若者文化）の関係

問６　髪を染めることは、いいと思いますか。
１．とてもそう思う　２．そう思う　３．どちらともいえない　４．そう思わない
５．まったくそう思わない

問８　ピアスをすることは、いいと思いますか。
１．とてもそう思う　２．そう思う　３．どちらともいえない　４．そう思わない
５．まったくそう思わない

①中学生女子のお菓子持ち込みの規範意識と染髪

お菓子を持ってきてよいと思っている生徒は、染髪してもよいと思う割合が高い。

②中学生女子のお菓子持ち込みの規範意識とピアス

ピアスに関しても染髪と同様の関連が認められた。

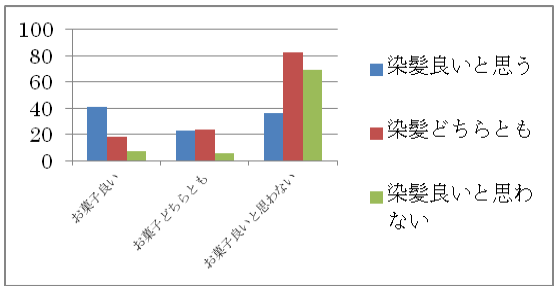
③中学女子の携帯電話持ち込みの規範意識と染髪

携帯電話を持ってきてもよいと考えている生徒は、染髪してもよいと思っている割合が高い。

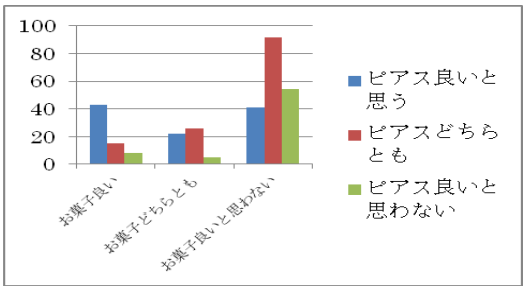
④中学女子の携帯電話持ち込みの規範意識とピアス

ピアスについても、染髪と同様の関連が認められる。

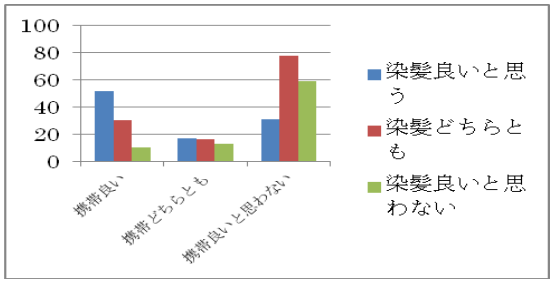
図①　お菓子持込の規範意識と染髪



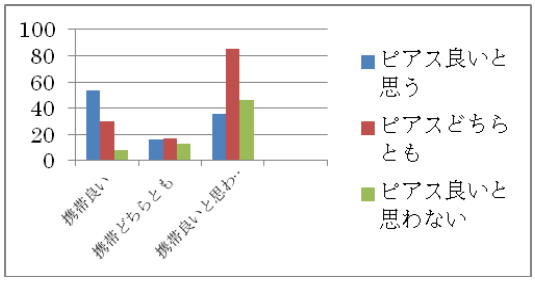
図②　お菓子持込の規範意識とピアス



図③　携帯電話持込の規範意識と染髪



図④　携帯電話持込の規範意識とピアス



中学生女子で、私物持ち込みの規範意識が低くなっている生徒は、そうでない生徒に比べて染髪・ピアスにも寛容である割合が高い。

若者文化への憧れが強いと、私物持ち込みへの規範意識が低下するという関連が見られた。

（３）まとめ

中学生女子は、所属意識が強く、集団への価値観や流行に敏感な時期である。それだけに既成の価値観や規範意識に疑問を持ったり、憧れを追い求めたりする傾向も強まるであろう。家庭・地域・学校では、これらの状況を理解したうえで、集団への所属意識を高められるような指導を行っていく必要がある。

４．我慢と学校に関連する規範意識

（１）第２部における結果の概要

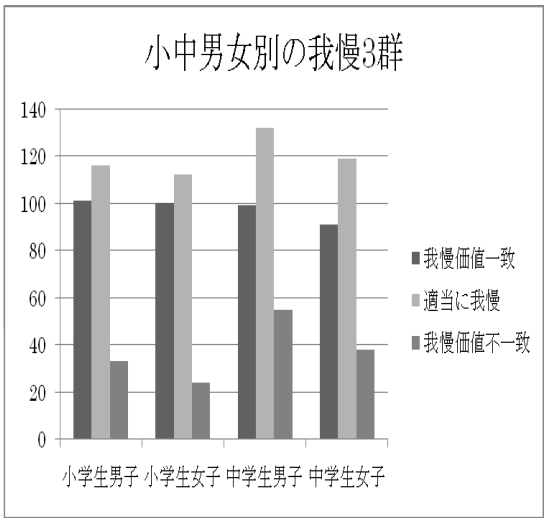
第２部では、小学生、中学生ともに、①勉強や仕事がつらくても我慢してやることはよいことだと思っている児童生徒は、実際に我慢しており、②我慢することをよいと思わない児童生徒は我慢してやることはしないという結果であった。しかし、③「我慢はよいと思うか」、「我慢してやる方か」のどちらに対しても「どちらともいえない」と回答する児童生徒や、④我慢することはよいと思っているが、我慢する方かどうかは「どちらともいえない」と回答する児童生徒も多い傾向にあることがわかった。

小学校高学年や中学生は、友だちや親との関係性の変化、学校や大人社会への疑問・反発、さらにはマスコミやテレビからの情報など影響を大きく受ける年頃である。それと同時に、迷いや苦悩、どうにもならない感覚、何とも言えない感覚を覚える時期でもある。その状況が、「我慢すること」に対する意識や行動に影響を与えているのではないかと考え、検討することとした。

この関連を検討するにあたり、問１０「我慢することはよいことだと思うか」と問１１「我慢してやる方だと思うか」とをクロスして、次の３つの群を構成した。その中で、我慢に対する意識に関わらず「どちらともいえない」と回答している「適当に我慢」群の人数や割合に焦点を当てることとした。

問１０　あなたは、勉強や仕事がつらくても、がまんしてやることはよいことだと思いますか。
1. とてもそう思う　　2. そう思う　　3. どちらともいえない　　4. そう思わない
5. まったくそう思わない
問１１　あなたは、勉強や仕事がつらくても、がまんしてやる方だと思いますか。
（選択肢は、上記問１０と同じ）

・「我慢価値一致」群
「我慢してやることはよい」に対し、「そう思う」「とてもそう思う」と回答した児童・生徒群
・「適当に我慢」群
「我慢してやることはよい」に対し、「どちらともいえない」と回答した児童生徒群
・「我慢価値不一致」群
「我慢してやることはよい」に対し、「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した児童生徒群



（２）我慢意識・行動と若者文化（染髪・ピアス）との関係

現在、マスコミやテレビからの情報は多岐にわたっている。ニュースや報道といった情報のみならず、人気タレントやアイドル、芸能人、スポーツ選手からの情報も多い。思春期の児童生徒たちが、それらに憧れを抱くのは当然であるが、その対象はピアスを付けて

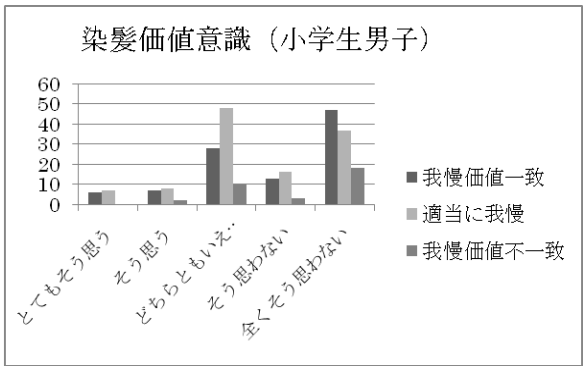
いたり、髪を染めていたりする場合も多い。そこで、染髪・ピアスを若者文化の一部として捉え、我慢意識・行動と若者文化との間にどのような関連があるのかを調べるため、若者文化として染髪にしぼって我慢の３群と問６とをクロス集計した。

問６　髪を染めることは、いいと思いますか。
1. とてもそう思う　　2. そう思う　　3. どちらともいえない
4. そう思わない　　5. まったくそう思わない

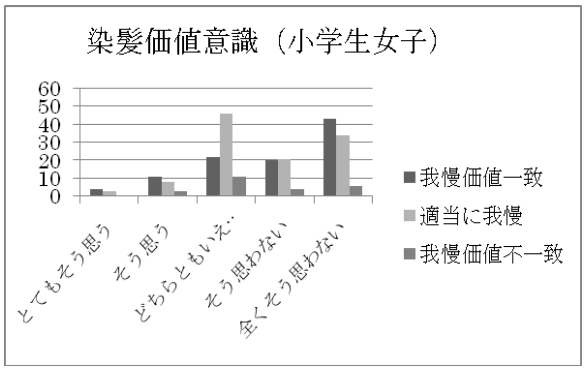
小学生の我慢意識・行動と染髪

小学生では、男女とも、「適当に我慢」群では、「どちらともいえない」が最も多い。一方、「我慢価値一致」群で、回答が最も多かったのは、「まったくそう思わない」である。

図①　小学生男子



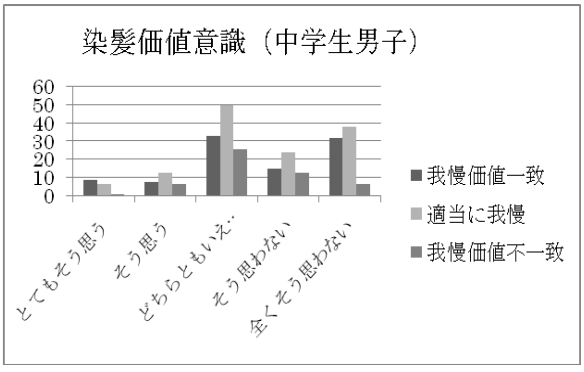
図②　小学生女子



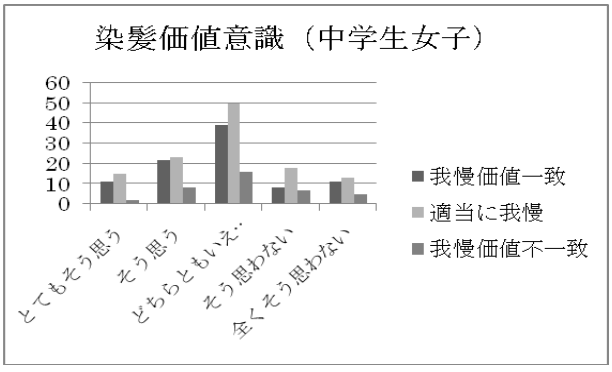
中学生の我慢意識・行動と染髪

中学生では、男女とも、「適当に我慢」群では、「どちらともいえない」が最も多い。一方、「我慢価値一致」群では、回答が最も多かったのは男女とも「どちらともいえない」であったが、次いで多いのは男子では「まったくそう思わない」、女子では「そう思う」である。中学生となると、“保留的な態度”の人数が他の回答よりも多い。

図③　中学生男子



図④　中学生女子



小・中学生ともに、人数では「適当に我慢」群が最も多く、その「適当に我慢」群では若者文化として取り上げた染髪について、「どちらともいえない」が最も多くなっている。

染髪等に代表される若者文化に対する“保留的”な意識と我慢における「適当に我慢」

する態度（“保留的”な態度）との間には、関連があることが見い出された。

「どちらともいえない」という背景には、思春期における迷いや大人社会に対する疑問や反発などが少なからず関係していると考えられる。

（３）我慢意識・行動と授業に対する規範意識

思春期における特徴として、自分の周りの環境に対する疑問や反発が考えられる。思春期の“周りの環境”としては、第一に学校や大人社会がある。そこで、我慢意識・行動と授業に対する規範意識との関連を、我慢の３群と問１７の先生に反発する項目とをクロスして調べることとした。

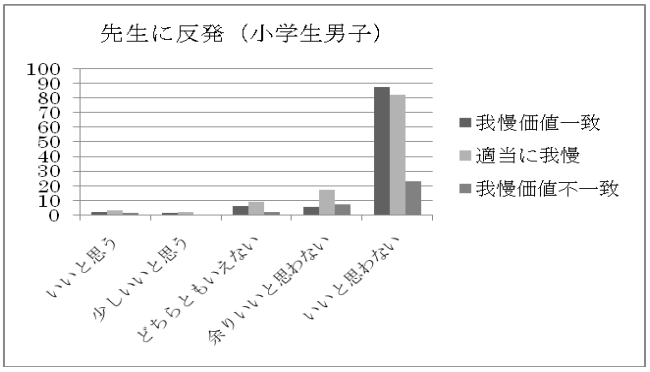
問１７　あなたは、次のことを授業中してもいいと思いますか。それとも、いいと思いませんか。

A　理由もなく授業に遅れる	B　先生に反発する	C　立ち歩く
D　トイレや水飲みに行く	E　おしゃべりをしたり、寝たりする	
F　うちわであおぐ	G　友だちのまじめな発言を笑う	

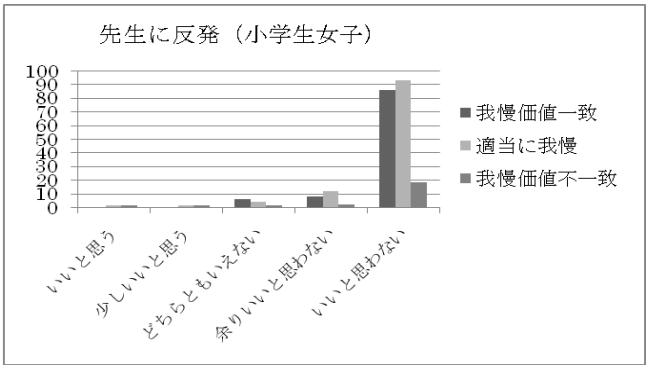
小学生の我慢意識・行動と授業に対する規範

小学生の「適当に我慢」群では、男女とも、「いいと思わない」が多い。

図①　小学生男子



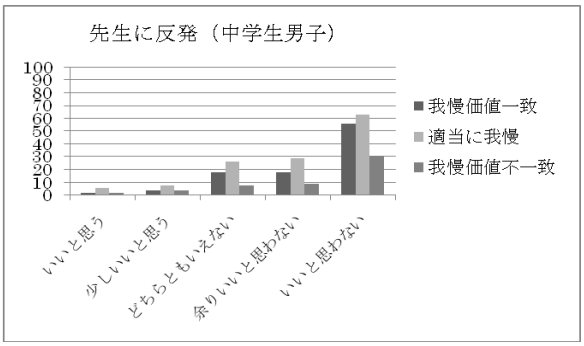
図②　小学生女子



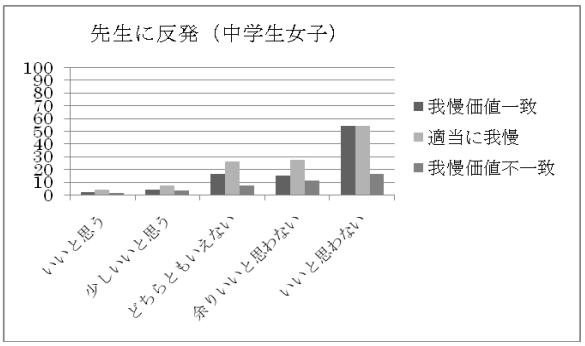
中学生の我慢意識・行動と授業に対する規範

中学生の「適当に我慢」群では、男女とも「いいと思わない」が多い。しかし、「あまりいいと思わない」「どちらともいえない」は小学生の時よりも増える。

図③　中学生男子



図④　中学生女子



小学生と比べると、中学生は男女ともに “適当に我慢する”態度を示す生徒が多く、授業中の規範に反する行動について「いいと思わない」と回答する割合は、中学生の方が少なくなる傾向がある。

どの小中学校にも授業中の規範について〝適当に我慢する“意識を持つ児童生徒が一定の割合で存在し、学年が上がるに連れてその割合が高くなる。授業中の規範に反する行動について我慢してまで守るべきかどうか、自分自身でも決めかねている児童生徒の存在を考慮した対応が求められる。

（４）我慢意識・行動と私物の持ち込みについての規範意識

次に我慢意識・行動と学校への私物の持ち込みについての関連を、我慢の３群と問１５のお菓子の持ち込みにしぼって、クロス集計して調べることとした。

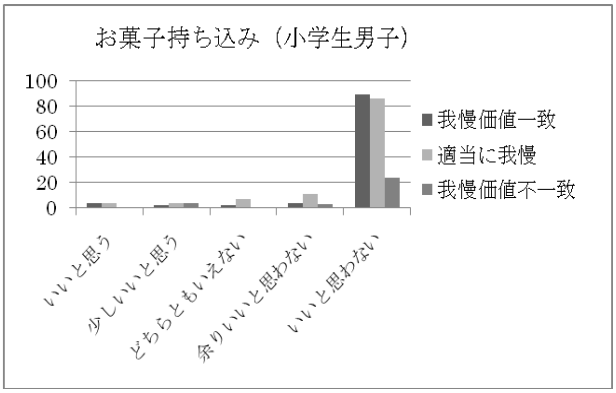
問１５　あなたは、次の物は学校に持ってきていいと思いますか。それとも、いいと思いませんか。

A　集金以外のお金　　B　勉強以外のマンガや雑誌
C　携帯ゲーム機などの遊び道具　　D　携帯音楽プレーヤー
E　お菓子　　F　携帯電話
G　ヘアーアイロンなどの道具

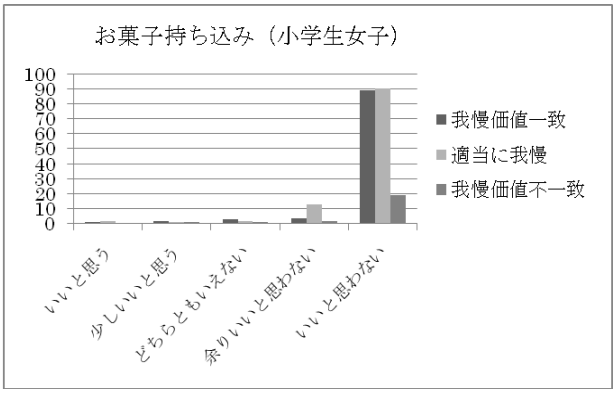
小学生の我慢意識・行動と持ち物の規範意識

小学生の「適当に我慢」群では、男女とも「いいと思わない」が高い。

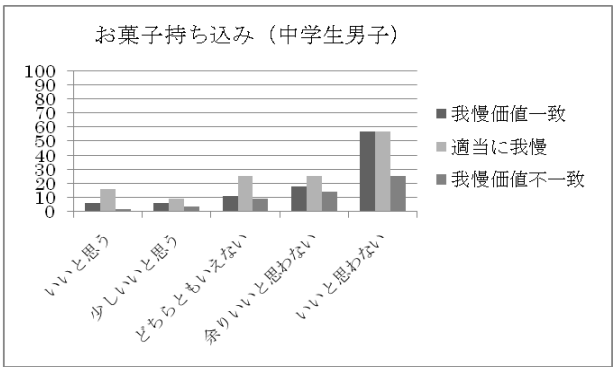
図①　小学生男子



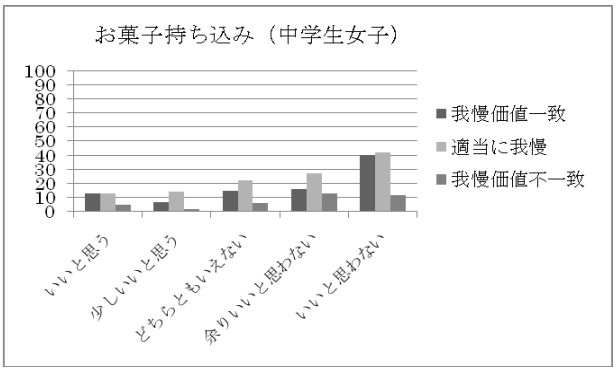
図②　小学生女子



図③　中学生男子



図④　中学生女子



中学生の我慢意識・行動と持ち物の規範意識

中学生の「適当に我慢」群では、男女とも「いいと思わない」が高い。しかし、「どちらともいえない」が小学生に比べ高く、「いいと思う」「少しいいと思う」も増える。

小学生と比べると、学校への私物の持ち込みに対して中学生は男女ともに“保留的”な意識を示す生徒が多くなるとともに、「いいと思わない」と回答する割合が少なくなっている。

私物の持ち込みの規範意識は、授業中の規範意識と同様の結果となった。

（5）まとめ

今回の調査から、中学生になると我慢に対して「どちらともいえない」という“適当に我慢する”態度を示すとともに染髪やピアスなどの若者文化、授業に対する規範、学校への私物持ち込みにおいても「どちらともいえない」と保留する傾向が強くなることが見出された。つまり、子どもたちの意識と行動は学年が上がるにつれて変化し、成長段階に応じた経験や心の変化、学校や社会の見方によって変わっていくことがわかる。特に、思春期に入る小学生高学年から中学生にかけては、友だちを始め、さまざまな環境が変化するため、意識と行動に隔たりが見られたり、「どちらともいえない」という“適当に我慢する”意識や態度になってしまうことが考えられる。

したがって、我慢することの意義や、「なぜそれをしなくてはいけないのか」、また「なぜそれを持ってきてはいけないのか」などを判断する根拠・理由を、発達段階に即した言葉で小学生の年代からしっかり伝えていく必要がある。

５．規範意識と職業選択の理由との関連

（１）持ち物の規範意識と職業選択の理由の関係

若者文化への憧れがあれば、規範意識が低下することが見出されたが、この若者文化への憧れによる規範意識の低下は、他にどんな影響を及ぼすだろうか。規範意識が低くなれば、自己有用感や意欲も低下し、行動面でもより消極的になるのではないかと考え、「持ち物」への規範意識と職業選択の理由に焦点を置き、中学生について問１５の携帯電話持ち込みへの規範意識と問１４をクロス集計して調べた。

問１４あなたは、職業を選ぶときにはどのような理由で選ぶと思いますか。（３つまで選択）

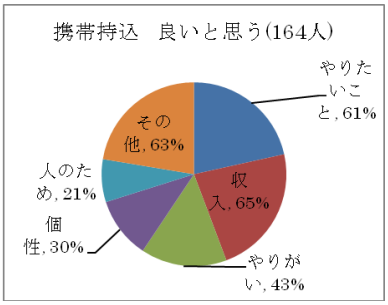
１．収入（給料）が多い　２．人のためになる　３．楽そうである

４．やりがいがある　５．有名な会社である　６．人との出会いが多い

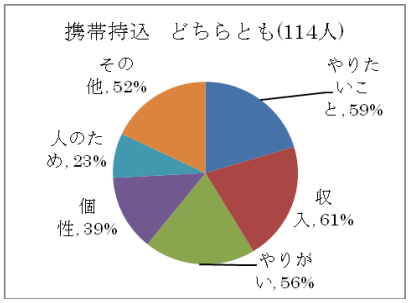
７．自分のやりたいことと一致している　８．自分の個性が生かせる

９．休み（休日）が多い　１０．有名になれる

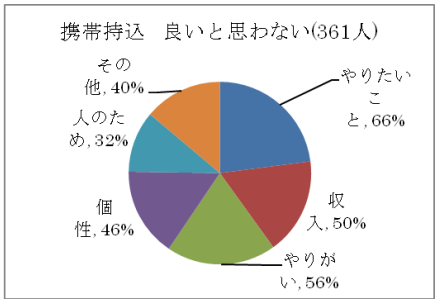
図①　携帯持込　良



図②　携帯持込　保留



図③　携帯持込　不良



（複数回答グラフ）

①携帯電話を持ってきてよいと思っている生徒の職業選択理由

携帯電話持ち込みへの規範意識が低い生徒は、「収入」が第１で、次いで「やりたいこと」で職業選択をする割合が高い。

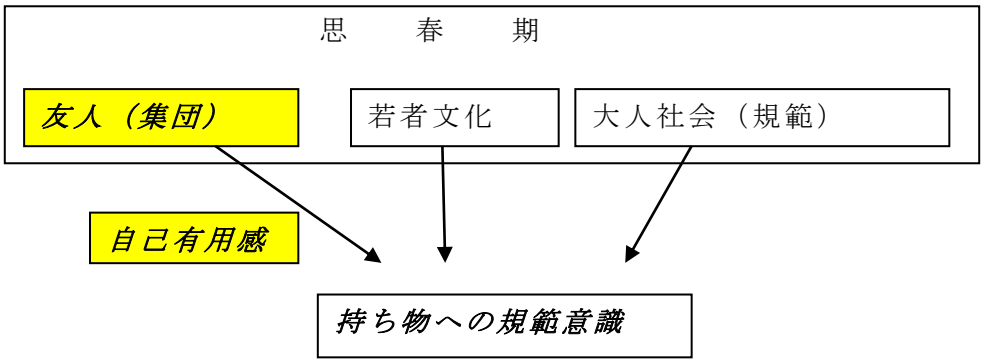
②携帯電話を持ってくるのはどちらともいえないと思っている生徒の職業選択理由

携帯電話持ち込みへの規範意識が「保留」されている生徒は、「収入」「やりたいこと」「やりがい」で職業選択する理由が３分される。

③携帯電話を持ってきていいと思わない生徒の職業選択理由

携帯電話持ち込みへの規範意識が高い生徒は、「やりたいこと」が第１で、次いで「やりがい」、「収入」で職業選択をする割合が高い。

職業選択の理由は、「持ち物」への規範意識が高いほど「やりたいこと」の割合が高く、逆に「収入」の割合が低い傾向がある。「やりがい」と「人のため」は、「やりたいこと」と同様に、規範意識が高いほど回答の割合が高い傾向がある。その理由としては、所属する集団への「規範意識」と「自己有用感」が密接に関係していることが考えられた。

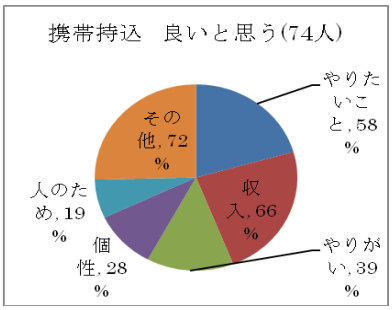


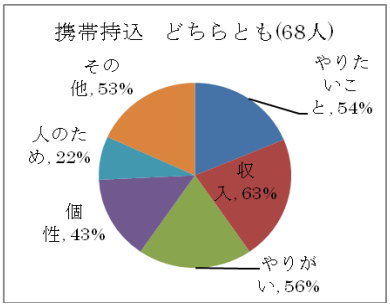
人は、所属する集団の中で安心感や充実感を感じることで他の人のために何かをしようという思いを抱き、実際に行動を起こし肯定的な評価を得て「自己有用感」を感じる。そして、そのような経験を通し人間関係を円滑にするための集団規範の必要性も実感的に理解していく。規範意識が高いほど職業選択の理由として「収入」という個人的・経済的な事柄に比べ、「やりたいこと」「やりがい」「人のため」という集団や他者との関係性を通して培われる事柄が多くなるのは、このような「規範意識」と「自己有用感」との関連のためと考えられる（資料C参照）。

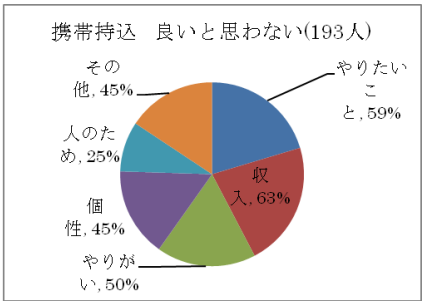
（２）中学生男子について

規範意識と職業選択の理由の関連を中学生全体について見れば、上記の結果となったが、中学生男子に関しては、異なった傾向を見い出すことができた。

④中学生男子の携帯電話持ち込みの是非と職業選択の理由のクロス







（複数回答グラフ）

前述のように中学生全体では、規範意識が高くなるに連れて、「収入」を職業選択の理由に挙げる割合が低くなるが、男子に限ると、規範意識が低くても高くても「収入」を選ぶ割合がほぼ同じで選択理由の第１となっている。資料Ｄによると、中学生男子は女子に比べ、職業について利己的なものを求める傾向がある一方、「なりたい職業がある」、「希望の職業について調べる」という割合が少ないとのことである。

（３）まとめ

規範意識が高いほど、「やりたいこと」の割合が高くなる傾向があることが分かった。また、中学生男子では規範意識に関係なく、「収入」を職業選択理由にあげていることも分かった。「やりがい」ではなく「収入」を選ぶことが悪いのではなく、職業選択の理由を広げ

るためにも、キャリア教育は重要であると考えられる。小学生の段階においても、社会的自立・職業的自立に向けて、その基盤を形成するきっかけとなる重要な時期である。キャリア教育を通して将来の自分に夢や希望を抱かせる。また、家族や友だち・地域の人々への関心や信頼感を高め、人々が責任を果たしながら様々な社会を築いていることに気づかせたりする必要がある。小学校では色々な場所に行って社会人と交流する機会や、学校に来て一緒に作業したりする機会も多い。その中で働いている人の気持ちを考えたりすることなどによって職業についての視点も変化していくと考えられる。その結果、大人になった時の自分の進路を意識し、「自己有用感」を求めた職業選択の基盤となるであろう。

資料 C

児童生徒は，他者と協力して何かをした時に他の人に支えてもらった経験から，他の人のために何かをしようという思いをもつことができる。そして，その思いを行動に移し，他の人から肯定的な評価を得た時に，自分が他の人のために役立っているという「自己有用感」を感じることができる。そういった経験ができた児童生徒にとっては，所属している集団がかけがえのない集団になっており，その中で人間関係を円滑にするための規範の必要性についても実感的に理解し，内面化が進む。

（H21 年度版　児童生徒の規範意識を高めるための一考察・・宮城県教育研究グループ）

資料 D

H19年度　北名古屋市　中学生・大学生アンケート結果

職業選択（中学生・大学生）

◆中学生で、将来*なりたい職業が「ある」*は約半数、「ある」は女性で６割近くと高く、*男性を10ポイント以上上回っている*

◆中学生が職業を選択するにあたって大切に思っているのは、男女ともに「自分の好きなことが生かせる」「安定して長く続けられる」こと、*「大きな会社である」「休みが多い」は男性が女性を上回っている*

◆中学生で、希望する職業につくために調べたり、努力をしているのは、いずれも女性で高く、男性を10ポイント以上上回っている

□中学生のうち、どうしたら希望する職業につくことができるのかを調べることが「ある」は54.0％、その職業につくために努力していることが「ある」は33.7％である。性別にみると、いずれも「ある」は女性で高く、男性を10ポイント以上上回っている。